國語問題の樞軸

新村出

國語問題の樞軸は、歴史的に回顧してみると、とかく文字の方に偏し、言語そのものゝ問題は閑却されがちであつたことは爭はれない。それには理由のあることであるが、それは今省いて進むとして近年は言語の側から見た國語問題も、文字の上から見た國語問題に對して、盛に論議されるやうになつたのは、慶ばしいことである。しかしまだ〳〵文字本位の國語問題に比して、論壇でも教壇でも、因襲的に主力を占めてゐるやうな有樣であるむろん兩方面からの解決が必要なるは、申すまでもないのであるから、兩々並行しつゝ進むべきことは今後も永續するにちがひない。

昨今最も重要な國語政策として唱道されてゐるのは、國語の東亞大陸への進出問題と、それに關連する國内における國語の簡易化問題と、この二つであらう。そのほか、それと不即不離の關係にある國語の統制問題また標準語乃至は基本語問題などもあるが、國策上最も重要視されてゐるのは、國語の大陸進出問題と簡易化問題との二つ、なかんづく前者の方とすべきであらう。然しこれに關しては、既に一度論じたこともあるから、今は再びそれに觸れないでおきたい。

しかし國語問題が、單純な言語問題として、教育上の技術問題としてばかり考察されずに、國民の教養問題として、一般の文化問題として取扱はれる傾向が次第に進んで來たことは私の喜んで措かざる所である。國語學上の研究も、國語教育上の調査も、なほ未だ完全であるとはいへず、とかく一方的に偏して、公正な深密な業蹟を擧げ得ざる憾みのある

内譯

金七百五十圓也　出演者會費
金六百二十圓也　寄附金
一金五百八十六圓九十四錢也　會長清寄附

支出の部

金千九百五十六圓九十四錢

第三十四回は四月廿二、三、四の三日間日本橋倶樂部に開催と決定、申込は三月卅一日限り。事務所東京市本所區東兩國二ノ四細川浩一方（電話本所八一八番）

◉日本因會總會

例の如く十二月廿五日文樂座に開催會長津大夫代理津の子、土佐古靱、角、叶、文字、大隅、敷島長尾、春香、新左衛門、助三郎、叶、吉彌、綱造、勝平、寛治郎、清六、友造、新造等の顏は見えたがチョボ問題さへ片付かず協會から新體制やら出たるも軌道に乘るに至らず何等纏りたる樣子も見え

ことは、私の屢々慨歎し且つ叫んだ所であるが、今後ます〳〵專務機關なり專門學者なりに調査と研究とを要望するの外はない。それと同時に國語問題を常に教養問題や文化問題と關聯せしめて根本的に考究することを怠らないやうに希望したい。

然るところ、さき程開かれた大政翼贊會の中央協力會議において、第四委員會たる文化關係の委員會の席上、山本有三氏が提唱した假名呼稱の廢止案は、極めて妥當な、機宜にかなつた新問題として、大に文化界の視聽をひいた。山本有三氏は昭和十二年ごろか、振假名廢止の問題を提案して、普く操觚界や教育界や學界の意見を徵したばかりでなく、更に進んで振假名に關する國語學的研究を日本言語學會に依託して、その研究費をも寄附されたやうな經緯もあつた。これは當時の新聞雜誌その他單行の冊子によつて周知の事實であり、既に少壯の學徒が研究に着手し鋭意山本氏の篤志に報いんとしつゝある現狀を特に私として報じておきたい。

その間、私は相共に言語學會の經營に協力しつゝある東大教授の小倉進平博士と共に、山本氏と鼎坐懇談して國語問題を論議した際、假名といふ稱呼の廢止についての意見をかはしたことがあつた。それより前、昭和十一年ころか、私も岩波講座の國語教育の紙上の附言に、漢字の制限に論及し、なるべく假名本位すなはち假名樞軸を以て日本の國字體制を組立てゝゆくやうにしたいことを述べ、日本漢字の浮動性に妨げられることは絶えぬとしても、漢字を補助字とし、假名を本字とし國字として進むべきものであることを說いたことがある。

そして少くとも假名といふ稱呼を廢止し改定したいものであることをも主張したが、別に改稱の提案も試みなかつたが、要は國語漢字の本末と假名漢字の主客とを辨別すべきことを力說しようと思つたのであつた。

山本、小倉兩氏と私との會談は、昭和十四年の初夏のころかと思つたが、その少し前、私

ず目出度散會した。二三の入會者ありたる由に聞く。

◉昭聲會第三回

一月七日より三日間ラジウム温泉階上に開催、記者は急遽東上の要件起りたれば乍遺憾缺席せり依つて番組を掲げ敬意を表す。

△初日(一月七日)

日吉丸三昇。鮓屋松蔦。新口當玉。妙心寺初音。忠四みやこ。堀川キ十。谷三鳴門。御殿文司。儀作松光。大切掛合忠七(由良之助松光)(九大夫靜)(重太郎璃鶴)(彌五郎松蔦)(おかる龍司)(喜太八標柳九)(力彌富玉)(伴內歌昇)(平右衛門ひよこ)、糸周防

△二日目(一月八日)

鈴ケ森文司。宿屋愛子。玉三吉乃。紙治龍司。合邦千鶴。忠四榮鳳。鳴戸璃鶴。上燗屋野香。岡崎靜。大切掛合忠七。由良之助九一。九大夫靜、重太郎松光。彌五郎龍司。おかる文司。喜太八初音。力彌富玉。伴內歌大。平右衛門

は國語審議會の特別委員會の席上でも、假名樞軸の一項目を擧げておいたのであつた。その後、この問題については、私の年來の主張でこそあつたれ、特に言議をつひやすことを敢へてすることなく、忘れるともなく忘れてゐた姿であつたところ、今度あゝいふ檜舞臺で山本氏によつて天下晴れがましき一問題として扱はれたことは、國語問題に關心する人人にとりて、痛快なることであつた。よしんばそれが決議にはならず、單に岸田文化部長の個人的賛同を博したばかりでなく、大方の共鳴を得たらしくもあり、且つ世間から空前の反響をよびおこしたにとゞまるものであつたにしても、將來の重要なる問題として一般に考慮されねばならなくなつたことは、私どもの多として大いに感謝すべきところである

例へば國語審議會における漢字整理の調査委員會なども、假名の改稱とともに假名の資格また昇格の問題、すなはち假名と漢字との主客關係を徐々に改修すべき問題、或は一歩を進めると、漢字使用の限定統制の問題にまでおよぶやう調査を進展させてゆくこと等々の必要が大に考慮されるやう希望されて來はしないであらうかと思ふ。

言葉をかへて申すならば、日本で歴世にわたつて文字といへば漢字が本格的のものであり假名は假りのもの、間に合せものであるといふところの、内外本末を顚倒した錯覺を一掃し清算し去つて、テニヲハや送假名ばかりでなく、なるべく主要な國語の實辭はもちろん、漢語のうち差支のない虚辭また實辭は、假名を本體にすることに定め、個有名詞などを除いた一般の宛字を禁止するが如き案を考慮してみるとか、幾多の同訓の漢字の使ひわけ方を全然無視するに至らずとも、大に制限してゆくとか、漢字使用に關する種々の細目案を調査して、假名稱呼の改定とその根本觀念の是正との提案の研究に向つて邁進してもらひたいと思ふのである。

一言すれば漢字使用の新體制ともいふべき大綱と細目とを速に案出提供されたいと希ふのである。漢字の字畫や字數の整理ばかりでなく、字種の整理をも斷行する爲には、從來

三八五。糸周防
△三日目(一月九日)
御殿三鳳。太十辰昇。安達三昇榮。谷三ひよこ。本下歌昇。宿屋叶。赤垣標榔九。河庄晴山。御所櫻三八五。大切掛合忠七。由良之助標榔九。九太夫靜。重太郎野香。彌五郎文司。おかる璃鶴喜多八ひよこ。力彌富玉。伴内歌昇。平右衛門榮鳳。糸周防(千秋樂)

◉日本因女研會

二月十七八兩日岡島會館に開催甚だ薄いので氣の毒であつたが。春幸勘腹。平助宿屋。雛代柳この開口なら無難と思ふたら幸に期待は外れなんだ。聲の技工であるから口の開き方聲の遣ひ方が第一、人形の腹これを忘れては全然ものにならぬ、これから蹈み出す若女是非大成を禱る。雛昇袖秋祭文やはり何といふても當代の花形、聲もあり舞臺の態度から何等不足をいふ所なかりし。食事に出たので

閑却されてゐた方面の調査を至急進めてゆくやうにありたいと念願して止まないのである。これらの點について私はこれまでも折々柳田國男氏などとも意見を述べ合つたこともあり場合によつては自分もこれらの問題について別に新に調査機關を起すの要がありはしなからうかとさへ思つて、考案をも練りかつ有力な筋にも協力を求めたことがないでもなかつた。かくて荏苒決行も實現も出來ずにゐたところ、今般はからずも山本氏の獅子吼によつて、或はかゝる問題の研究の端緒が開かれはしないだらうかといふ喜びを得たのは、異常な幸である。要するに假名の稱呼の改正は、單に名稱の問題にとゞまらず、實は假名の資格の向上の問題であると同時に、漢字の限定の問題にもなるのである。

紀元二千六百一年の新春に方つて、國語問題の樞軸として私は先づ私の多年の宿望たる假名樞軸論を提案して、敢へて公私諸方面の研究と調査とを期待するのである。

事變下に於ける 淨瑠璃興隆論

（前號續き）

附 人形演技禮讃

本誌同人　川崎金次郎

處がこの雲右衛門が、始めて世に喧傳されし時、同業の人々の間には、彼の浪花節は本格的にあらず、邪道なりとの非難があつたが、兎にも角にも、當時は雲右衛門の打つ興行天馬空を行くが如く、至る處聽衆を醉はしめた、腕前正に偉なりと謂ひつべくである。隨春駒の陣屋。團司猿廻しは聞殘した。翌日は大入滿員、春幸圓覺寺平助玉三。雛代鳴戸は執れも無難もつと精神的に……力を入れて……ほしい。蔦松逆櫓大分力が入つて居た。精進々々。東の合邦さき頃東廣師匠に逝かれて京城から歸阪した名古屋出身の人であるが、先づ〳〵一人前。これなら勉強すれば成功するであらう容姿、體質、聲量、藝質、年齢共に現代人である。一心不亂に精進々々。父君はこれが爲はる〳〵名古屋から來阪して居る。親なればこそ子なればこそ、これを忘れると罰が當るぞ雛駒揚屋何等いふべき所もなく悠艶に出來たが、概して今一文の熱がほしい樣である。綾助忠九これは聞かない事にして置き改めて聞直すべし（千秋樂）

一月十四五兩夜岡島會館、春廣組討。一平鈴ケ森。蔦松先代御殿